

読書

宝暦治水は、一七五三(宝暦三)―一五五年に薩摩藩が美濃で行った治水工事である。岐阜県が鹿

児島県と姉妹県の協定を結ぶきっかけとなった。

岐阜県西南部は木曾三川下流域に位置し、しば

な負債を負うこととなり、病気や割腹による藩士の犠牲者は八十数人のぼった。

「蒼海記」や「尾濃勢

州川通御普請御用」は、

多良郷(現大垣市上石津町付近)の在地旗本で水

県図書館に行こう

こんな情報待っている

しば大規模な洪水に見舞われた。江戸幕府は、その対策として三川分流工事を計画、薩摩藩に手伝普請(てつだいぶしん)を命じた。薩摩藩は費用や人の負担を強いられ、結果として莫(ばく)大

行奉行の高木氏が宝暦治

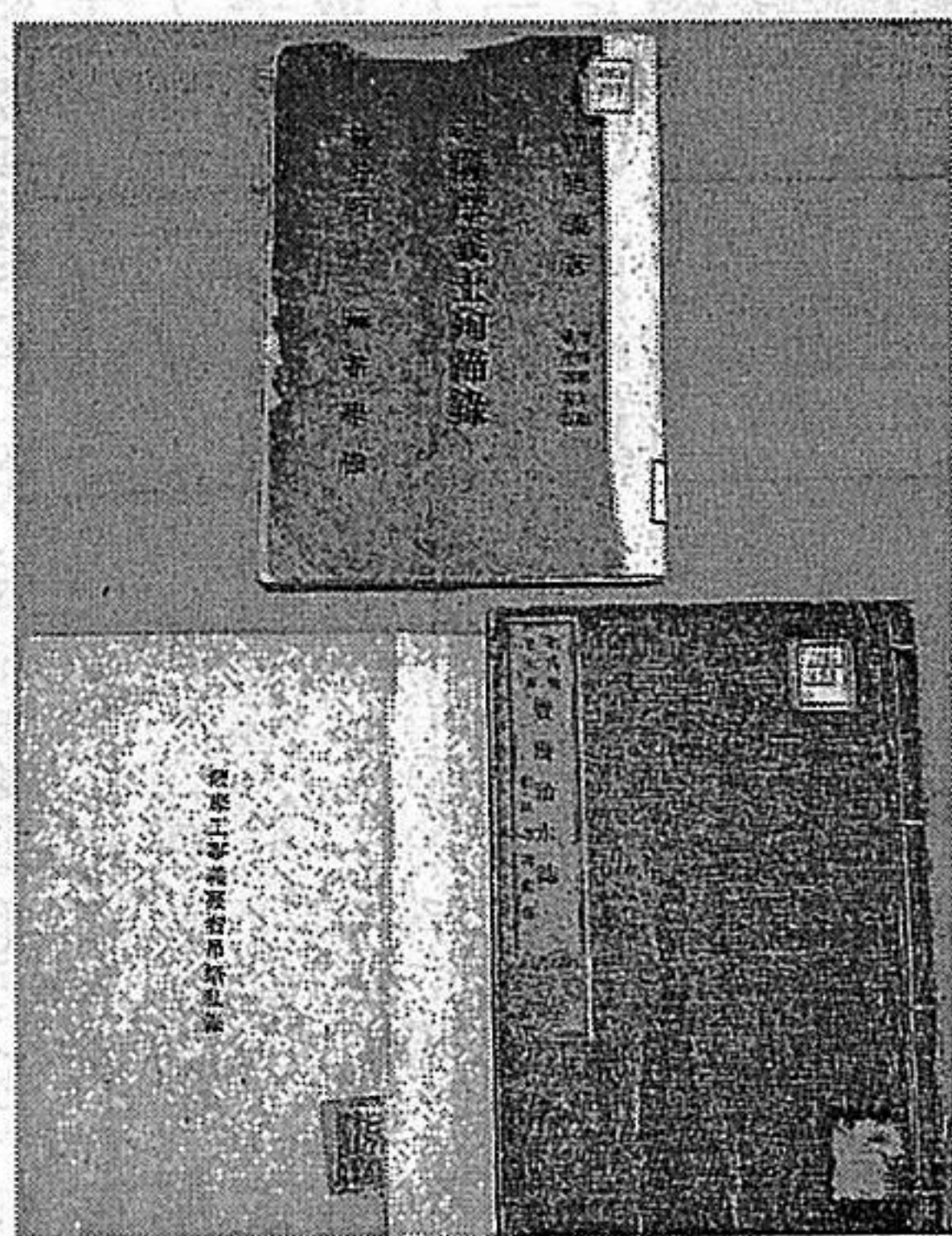
水に関して残した日記や

記録。薩摩側からみると

幕府方にあたるが、資料

からはそんな単純な対立

「宝暦」以降の治水史料 250年続く薩摩との縁



宝暦治水関係図書の数々。右下の「濃尾勢三大川宝暦治水誌」は原本

かめ関係者の苦悩がうかがえる。名古屋大所蔵資料だが「県史史料編」などで読むことができる。

治水工事は、宝暦以後も多くの藩によって幾度か行われたが、当時の技術力の限界や、複雑な利害関係のため、十分な成果が得られなかった。三川分流工事は明治期、オランダ人技師デ・レーケによる工事を待たねばならなかった。デ・レーケは工事前に当地を視察し、現状分析と河川改修構想を「木曾川下流の概説書」などにまとめ

たが、これらの資料に、宝暦治水に対する見解などを見ることができ。明治期、あらためて功績をたたえる機運が高まり、義士の苦闘を称え、後世に伝えるため様々な資料が刊行された。明治期の「濃尾勢三大川宝暦治水誌」をはじめ

現在まで、地元はもとより鹿児島でも数多く出版されている。顕彰会機関紙「薩摩義士」のように毎年届けられるものもあり、こんなところにも約二百五十年前から続く両県の縁を感じることができる。

BOOK REVIEW